

ルルモツペの逸話 2

(松浦武四郎の近世蝦夷人物史)

孝女ヌイタレの事1

西地ルルモツペは、西はマシケ、東はトママイと境をなしている。海岸九里半の広さで、昔は人家百軒あまりだっ

多いために徐々に二八取といわれる出稼ぎの者が多くやって来るようになった。近頃は繁盛して遊女も来ると聞いている。

ここに一人のアイヌの孝行



だが、今(一八五八年頃)は、五十五軒、人口二百人ほどまで減ってしまったという。ここは漁業が盛んで、春はニシン、夏はナマコ、アワビ、秋は鮭、鱒と様々な魚が

娘がいる。名はヌイタレと言って、今年二十四歳、その父親はヲタトンホルと言った。すでに十年ばかり前に死んでしまいい、母が一人残っている。名はカネサイと言いい、当

年四十六歳になるが、十二年前より、病気になるなり、その時九歳と四歳になる男の子、六歳になる女の子と乳飲子がいた。さらに父の死後もなく一児が生まれたが、母は父の死を悲しみ、さらに病気が重くなってしまった。今では、大、小便の用も自分で出来なくなってしまった。孝行娘のヌイタレは、誠心誠意、母を看病し、九歳を頭に四人の子供の世話を十三歳の時からしたのであった。

十三歳では人並の働きもできず、海辺へ行つては流木を拾い、魚のある時は浜に出て網の目からこぼれた魚を拾った。又、夏は山に行き、トレフ(うばゆり)、トマ(えんごさく)などの根を掘ったりして、一生懸命孝行していた。そのうち、追々、弟、妹も成長して、ヌイタレを手伝うようになったが、母の病気はますます重くなるばかりである。自分の体の不自由や親子の間柄とは言え、朝に夜に手厚い看病を受けることを申し訳なく思つて「長く煩い、子供たちに面倒かけるよりは、死んだ方がいい。」と言うようになった。これを聞いて

福士 広志

海のふるさと館学芸係長

「おまえも十九歳になつた。もう、結婚したほうがいい。よい人がいなければ、誰かに世話して貰うのも良い。」と

言った。家の近くにコシカという男がいた。当時すでに四十五歳で、なかば白髪になつていて、普通の人なら嫌がるころだが、病気の母とたくさん弟、妹を抱えた娘と結婚を承諾したのである。ヌイタレも母の言いつけならどんな年取った人でもいいと言つて二人は結婚した。